

小野市農業委員会「農地等の利用の最適化の推進に関する指針」

平成 30 年 11 月 21 日
小野市農業委員会

第 1 基本的な考え方

農業委員会等に関する法律（昭和 26 年法律第 88 号。以下「法」という。）の改正法が平成 28 年 4 月 1 日に施行され、農業委員会においては「農地等の利用の最適化の推進」が最も重要な必須事務として、明確に位置づけられた。

小野市は、農地面積が広く、地域によって農地の利用状況や営農類型が異なっており、地域の実態に応じた取り組みを推進し、それに向けた対策の強化を図ることが求められる。また、高齢化等により遊休農地の発生が懸念されていることから、その発生防止・解消に努めていく一方、稲作による担い手への農地利用の集積・集約化においては、農地中間管理事業を活用しながら取り組んでいく必要がある。

以上のような観点から、地域ごとの強みを活かしながら、活力ある農業・農村を築くため、法第 7 条第 1 項に基づき、農業委員と農地利用最適化推進委員（以下「推進委員」という。）が連携し、担当区域ごとの活動を通じて「農地等の利用の最適化」が一体的に進んでいくよう、小野市農業委員会の指針として、具体的な目標と推進方法を以下のとおり定める。

なお、この指針は、「農林水産業・地域の活力創造プラン」（平成 25 年 12 月 10 日農林水産業・地域の活力創造本部決定）で、「今後 10 年間で、担い手の農地利用が全農地の 8 割を占める農業構造の確立」とされたことから、それに合わせて平成 35 年を目標とし、農業委員及び推進委員の改選期である 3 年ごとに検証・見直しを行うものとする。

また、単年度の具体的な活動については、「農業委員会事務の実施状況等の公表について」（平成 28 年 3 月 4 日付け 27 経営第 2933 号農林水産省経営局農地政策課長通知）に基づく「目標及びその達成に向けた活動計画」のとおりとす。

第2 具体的な目標と推進方法

1. 遊休農地の発生防止・解消について

(1) 遊休農地の解消目標

	管内の農地面積 (A)	遊休農地面積(B)	遊休農地の割合 (B/A)
現 状 (平成30年4月)	2,350ha	1.67ha	0.07%
3年後の目標 (平成33年4月)	2,320ha	0.8ha	0.03%
目 標 (平成35年4月)	2,300ha	0ha	0%

注1：「新・農地を活かし、担い手を応援する全国運動」の運動目標に基づき、遊休農地の面積及び割合は、「ゼロ」を目標としている。

注2：管内の農地面積は、耕地及び作付面積統計における耕地面積を記入。

(2) 遊休農地の発生防止・解消の具体的な推進方法

① 農地の利用状況調査と利用意向調査の実施について

- ・農業委員と推進委員の担当制による農地法（昭和27年法律第229号）第30条第1項の規定による利用状況調査（以下「利用状況調査」という。）と同法第32条第1項の規定による利用意向調査（以下「利用意向調査」という。）の実施について協議・検討を図る。それぞれの調査時期については、「農地法の運用について」（平成21年12月11日付け21経営第4530号・21農振第1598号農林水産省経営局長・農村振興局長連名通知）に基づき実施する。なお、従来から農地パトロールの中で行っていた、違反転用の発生防止・早期発見等、農地の適正な利用の確認に関する現場活動については、利用状況調査の時期にかかわらず、適宜実施する。
- ・利用意向調査の結果を踏まえ、農地法第34条に基づく農地の利用関係の調整を行う。
- ・利用状況と意向調査の結果は、速やかに「農地情報公開システム（全国農地ナビ）」に反映し、農地台帳の正確な記録の確保と公表の迅速化を図る。

② 農地中間管理機構との連携について

- ・利用意向調査の結果を受け、農家の意向を踏まえた農地中間管理機構への貸付け手続きについて市農政課と連携しながら、スムーズな対応を図る。

③ 非農地判断について

- ・利用状況調査と同時に実施する「荒廃農地の発生・解消状況に関する調査」によって、B分類（再生利用困難）に区分された荒廃農地については、現況に応じて速やかに「非農地判断」を審議に諮り、守るべき農地を明確化する。

2. 担い手への農地利用の集積・集約化について

(1) 担い手への農地利用集積目標

	管内の農地面積 (A)	集積面積(B)	集積率(B/A)
現 状 (平成 30 年 4 月)	2,350ha	519ha	22.09%
3 年後の目標 (平成 33 年 4 月)	2,320ha	696ha	30%
目 標 (平成 35 年 4 月)	2,300ha	1,840ha	80%

注1：「農林水産業・地域の活力創造プラン」の政策目標に基づき、担い手への農地利用集積率は80%を目標としている。

注2：管内の農地面積は、耕地及び作付面積統計における耕地面積を記入。

(参考) 担い手の育成・確保

	総農家数 (内、主業農家数)	担い手			
		認定農業者	認定新規 就農者	基本構 想水 準 到達者	特定農業 団体・集落 営農組織
現 状 (平成 30 年 4 月)	2,084 戸 (79 戸)	47 経営体	3 経営体	0 経営体	23 団体
3 年後の目標 (平成 33 年 4 月)	2,084 戸 (79 戸)	58 経営体	10 経営体	0 経営体	25 団体
目 標 (平成 35 年 4 月)	2,084 戸 (79 戸)	58 経営体	10 経営体	0 経営体	25 団体

注1：この数値は、農家数等を確認し「担い手への農地利用集積目標」を定めるための参考値である。また「人・農地プラン」等の見直しに当たっても活用。

注2：「総農家数（内主業農家数）」は2015年農林業センサスの数値を記入。

注3：目標数値は、市産業創造課と調整の上記入。

(2) 担い手への農地利用の集積・集約化に向けた具体的な推進方法

① 「人・農地プラン」について

- ・地域ごとに人と農地の問題解決のため、それぞれの農業者の意思と地域の資源に照らした実現可能性のある「人・農地プラン」の作成と見直しに市農政課と連携して行う。

② 農地中間管理機構等との連携について

- ・農業委員会は、市、農地中間管理機構、農協等と連携し、(ア) 農地中間管理機構に貸付けを希望する復元可能な遊休農地、(イ) 経営の廃止・縮小を希望する高齢農家等の農地、(ウ) 利用権の設定期間が満了する農地等についてリスト化を行い、「人・農地プラン」の作成・見直し、農地中間管理事業の活用を検討するなど、農地の出し手と受け手の意向を踏まえたマッチングを行う。

③ 農地の利用調整と利用権設定について

- ・管内の地域の農地利用の状況を踏まえ、農地中間管理機構による簡易な基盤整備事業の活用と併せて集落営農の組織化・法人化、新規参入の受入れを推進するなど、地域に応じた取り組みを推進する。

④ 農地の所有者等を確知することができない農地の取扱い

- ・農地の所有者等を確知することができない農地については、公示手続を経て都道府県知事の裁定で利用権設定ができる制度を活用し、農地の有効利用に努める。

3. 新規参入の促進について

(1) 新規参入の促進目標

	新規参入者数（個人） （新規参入者取得面積）	新規参入者数（法人） （新規参入者取得面積）
現 状 （平成 30 年 4 月）	1 人 (0.4ha)	0 法人 (0ha)
3 年後の目標 （平成 33 年 4 月）	1 人 (4ha)	1 法人 (5ha)
目 標 （平成 35 年 4 月）	1 人 (4ha)	1 法人 (5ha)

注：新規参入については、現状の担い手農家等の数や遊休農地の発生状況等を考慮しながら、農業委員会の区域内に必要な経営体数を試算する。

(2) 新規参入の促進に向けた具体的な推進方法

① 関係機関との連携について

- ・兵庫県・兵庫県農業会議、農地中間管理機構と連携し、管内の農地の借入れ意向のある認定農業者及び参入希望者（法人を含む。）を把握し、集積に向けた橋渡しを図る。

② 新規就農への協力について

- ・市、農協、県農業改良普及センター等と連携し、情報の収集に努め、新規就農の受入れのフォローアップを図る。

③ 企業参入の推進について

- ・担い手が十分いない地域では、企業も地域の担い手になり得る存在であることから、農地中間管理機構も活用して、積極的に企業の参入の推進を図る。

④ 農業委員会のフォローアップ活動について

- ・農業委員会の区域内において高齢化等により空き家とセットの農地（遊休化）について、農地の下限面積に別段の面積を設定して新規就農等を促進する。
（下限 1a 指定）